

ILCA 第十九回ソウル大会の報告

韓国に比較文学の「辺境」を踏査する — 国際比較文学会 第十九回ソウル大会 (Aug.15-21, 2010) 報告と反省

稲賀繁美 (ICLA 理事)

賢人たちの叡智

人類の叡智を集約し、地球の将来への指針をしめすことに、比較文学の使命があり、その名を冠した国際学会をソウルで開催することの意義がある。こう真っ向から啖呵を切って、満場の聴衆を納得させるだけの実力者は、いまや世界中を探しても希だろう。韓国言論界になお大きな影響力を発揮し続ける李御寧教授が、大会冒頭の全体講演で口火を切り、この大役を見事に演じ切った。体調不良を押しての登壇だったが、口を開くや独特の才気煥発たちまち全開となって会場を圧倒した。ソロモン王は赤子の所有権を巡って争った女性二人に対して、赤子をふたつに割いて分け与えるという判決を示して、それに同意しない女性を真の母親と見定めた智恵によって賞賛される。だがそれより貴重なソロモン王の智恵は、それを求めて東方のエチオピアからシバの女王がわざわざ訪問したという事実、すなわち分割による判定ではなく加算による総合にあるのではないか。など意表を突く洞察に溢れた講演だったが、それを無理矢理一言で要約しよう。

碩学記号学者は、現今の知識世界におけるデータ万能主義に警鐘を鳴らし、知識社会の限界を指摘し、将来の方向を提示する。曰く、データは情報へと加工されねば無意味であり、情報は知識の基礎にしか過ぎず、知識も集積だけでは知的貢献の材料に過ぎないのであって、人類の課題は知識社会の確立のうえに、いかにして叡智を養うかにある、と。その論旨を肉付けするために古代の哲学者、神学者から T.S. エリオット、さらに昨年物故したクロード・レヴィ=ストロース『今日のトーテミズム』(Penguin 版 p.171) まだが自在に引用される。如何せんそのあまりの雄弁卓越に、通訳が途中からはとてもついて行けず、韓国語不如意な聴衆には、なにか法外な叡智が輝いているという印象ばかりが放射されたに留まったのは残念だった。とはいえ英訳の一刻も早い公刊を望む声が多く聴衆から聞かれた。小冊子や電子配信のご一読をお勧めしてやまない。

いささか定型を無視して、無前提なままに報告を開始した。だがそれは意図してのことである。76歳を迎えた、元・初代文化大臣、李御寧氏を戴く韓国の知力と組織力が見事に発揮されたのが、今回のソウルにおける第十九回・国際比較文学会だったといつてよいだろう。日本からの参加としては、自ら **workshop** を立ち上げ、常ながら自らの発表で範を垂れた芳賀徹名誉教授の発表が、また見事だった。こちらは当年 80 歳、20 年前の東京大会の実行委員長だが、その実力は若手や中堅を遙かに陵駕した。大正の夢と潰えた理想郷の探求を武者小路実篤 (1885-1976) の「新しき村」に見据え、それが中国の魯迅・周作人兄弟や韓国の詩人、呉相淳 (1894-1963) らに伝播し、はては若き日の毛沢東 (1893-1976) の「学生之工作」(1919) にまで影を落としていた様を活写した。英文の細部まで神経が行き届き、ひとつひとつの文字が立ち上がりつつ、全体の論旨が岸辺に打ち寄せる波のように迫ってくる。これら最良の報告を英文で編集し、日本語へも翻訳して江湖に問えば、21 世紀の今日にも、それなりの社会的反響を期待でき、また東アジアの今日的意義を再確認し、将来への活路を拓くうえでも裨益するところがあるに違いない。だがそうした企画を刊行し、社会に着実に還元する術を、今日学術は急速に喪失している。芳賀・元副会長は、学会最後の別れの祝宴でも、韓国大会の成就を言祝ぐ一服の祝辞を述べ、それは韓国と日本との事情に通じない欧米の聴衆にも、大きな感銘を与えたと、人づてに仄聞した。先人たちの努力と智恵とを将来へと発展継承するための工夫が、今それだけに一層、要求されている。

大正文化史の脱国籍性と国際性

大規模学会の常として、個人で聴取できる発表の数は、著しく限定される。そのことは前提としたうえで、報告者が見聞したかぎりの発表から、将来への幾つかのピストを示しておきたい。

第一に東アジア近代の経験を韓・中・日の国境をとっぱらって総合的に検討する必要は、今更繰り返すまでもないが、これを実行に移すとなる話は別だろう。芳賀ワークショップでは、平石典子氏がエレン・ケイ (1849-1926) の日本で受容 (戸張竹風、金子築水、平塚雷鳥、本間久雄、厨川白村経由) を、韓国の金明淳、羅恵錫、金元円、中国の茅盾、陳望道などにまで拡げて要領よく発表した。各論をさらに発展させるためには、国際的な共同研究が不可欠となることだろう。また鈴木楨宏氏の発表も明らかにしたように、1918 年成立の「新しき村」はタゴールのシャンチニケトンに於ける学校経営とも呼応しているが、そのタゴールは英国デイヴォンのダーティントンの陶藝共同体に感化を受けており、やがて柳宗悦はそ

こに「英国における新しき村」を見る。佐藤春夫の「新しき町」は、地元・新宮をも巻き込んだ大逆事件（それについては辻原登の最近の小説が想起される）を背景とし、一九年の五・四運動の高まりが直接に感化を与えている。ダーティントンの運動の背景にはウィリアム・モリスの存在を無視できないが、西成彦氏が分析した宮澤賢治の「農民芸術概論綱要」の背景には『改造』他に訳出掲載されたモリスの思想からの直接的な影響が見て取れる。そうした文脈を再構成してみると、バーナード・リーチと柳の「民藝」の傍らで、宮澤賢治との意外な親近性も、同時代のユートピア志向として見えてくるだろう。そして賢治の参画した国柱会に名を連ねた石原莞爾は、農村開拓の夢を満洲事変へと誘導した。

国境を越えた知的情報の流通が活発となった大正時代は、同時に各国のナショナリズムが高揚を見て、文化間の軋轢が高まった時代でもある。劉岸偉氏は周作人と日本の関係を再検討したが、そのなかで、1920年代の北京大学日報に掲載された日本の芸術の底の浅さを指摘する消息筋の記事にたいして、周作人が他国の文化理解にとって敵意は何の役にもたたぬと論じた件に言及した。果たしてこの記事の情報の出所はどこだったのか。それを解明する必要があるだろう。なぜなら、中国美術を本流とすれば日本美術は支流に過ぎないとする認識は、1920年代初頭以来、中村不折をはじめ、ほかならぬ日本人たち自身が頻繁に表明していた見解であり、滝澤和軒などは、それを根拠に、矮小なる日本主義を脱して東洋主義の大義に帰一すべきと主張していたからだ。やがてこの論法が1930年代末に明文化される大東亜共栄圏思想の礎ともなる。そう考えれば、国境を越えた東洋近代の孕んだ可能性と表裏一体の危険性も、かえって鮮明に見えてくるはずである。

漢学の盛衰をめぐる東アジア文化史構想

こうした議論の前提として留意すべきなのが、例えば近代日本における漢学の盛衰だろう。これは北京大学の孟華教授が主催したワークショップでの発表だったが、北京大学・語言文化学系博士研究生の陸胤氏は、この経緯を、帝国大学における日清戦争期を挟んだ漢学科の組織改編から、1904年における支那学(sinology)の哲・史・文三科への編成にいたる制度史のみならず、当時の識者たちの論説とも適切に結びつけて、精緻な見取り図を描き出した。国・漢という対比が背景へと退き、それに代わって西・支・印という三幅対が、とりわけ井上哲次郎の意向を受けて哲学の世界での分類枠となってゆく。ここで日本哲学乃至「国哲」(?)は井上の意向とは裏腹に、横並びを果たさず、事実上帳消しとなる。だが、国文・国史という枠組みが確立され、その脇で学歴社会では「国漢」とい

う入試科目が幅を効かせてゆく。経学を包括していた「漢文学」の教養は、「支那文学」が支那思想から分離されるに従って、否応なく変質を被っていった。この経緯に照らしてみれば、従来の「支那」＝中国蔑視といった先入観を時代錯誤に逆投影するがごとき謬見は、今後確実に根拠を失ってゆくだろう。英・日両語に着実な学力を示す陸胤氏の発表は、新世代の可能性を如実に実感させるに足るものだった。だがその周到なる英語発表に、日本の思想史学会や中国文学会、あるいは中国哲学研究者集団はきちんと応答できるのだろうか。少なくとも国際比較文学会という舞台には、陸胤氏の研究に対論できる思想史関係専門家は出席していなかった。果たして英語を作業言語とする近代東洋思想研究という場合は、中・韓・日の枠を越えて成立するのか否か。

プロレタリア文学史研究、共榮圏哲学と越境性

研究対象領域が国境を跨いでいるからといって、現在の研究者集団がそれに対応できる組織を確立しているとは限らない。「アジア文学への新たな視座(2)」と題されたフォーラムは、1940年代の日本占領期の半島作家における東アジア文学構想、朝鮮と日本におけるアジア言説、ボルシェヴィツキ運動を中心とした近代の超克を巡るプロレタリア文学の脱植民化への奮闘、さらに日本併合期の韓国における文学の出版と検閲と、魅力的な話題を満載した部会だった。だが会場に足を運んでみると、発表者の多くが英語不如意なため、原則として韓国語で発表する、という。全員のペーパーの英訳が配布されていたが、残念ながら、辛うじて意味が拾える水準だった。教室には文芸評論家の金禹昌教授や、大会準備期の韓国比較文学会会長を務めた李応壽氏も出席して質疑に加わった。質疑には英訳がつくとの触れ込みだったが、遺憾ながら実際には不完全にしか機能しない。Soo Han Man 教授が扱った検閲の問題から述べるならば、同時代の日本や満洲国での検閲状況とその時代的变化を踏まえない一般論は危険かつ不十分だろう。また検閲の形式的分類にとどまり、具体的内容の検討を等閑にした処理にも批判があった。私見を述べるなら、折から光化門の修復が成り、「日韓併合」百周年の記念行事が行われたところだが、柳宗悦が『改造』に掲載した光化門保存の訴えがいかなる検閲を蒙り、いかに削除だらけの虫食いで刊行されたか、といった事実は知っておかなければ、半島で検閲の程度も評定できまい。さらに三十年代に入っても、例えば関東洲の大連のほうが、内地よりも検閲が緩やかだった証拠もある。

このように問題の解析に限界もあったが、多くの発表は、「内地」日本の専門家の常識を問い直すうえでも貴重だった。近衛内閣下の東亜新秩序(1938)宣言

に対して半島内の知識人たちも反応しているが、こうした経緯は、韓国史や思想を専攻する日本の一部の専門家に知られているだけでよいのだろうか。韓国が中国と日本との媒介を果たすべきとの議論を進めた金明植、韓国を日本へと溶け込ますのではなく、別途の実体として「内鮮一体」の理念を換骨奪胎しようとした仁貞植、中国大陆の改造を必至としつつ日本にあらたな普遍性を要求した車載貞。これら『三千里』の同人に対し、『人文評論』では満洲国の実験に民族協和の理念と土着の国民主義との合体の夢を託した崔載瑞、東亜共同体に複数国民の内面的自己調整機能を期待した朴致祐などが知られる。

尹大石 Yun Daeseok 教授の分析を借りるなら、政治弾圧の危険を背負ったうえでのこうした微妙な議論の背後には、一方には朝鮮文化を抹消して日本への完全な同化を是とする緑旗連盟の玄永燮や李永根の主張もあり、反対に半島の伝統を維持したうえでの統合を訴える『国民文学』の立場もある。これらの主義主張の錯綜と対立のなかに具体的な文学作品も紡ぎだされる。韓雪野 Han Unya, 金史良 Kim Sharang, 李孝石 Lee Hyoseok, 金延漢 Kim Jeongha さらには崔載瑞 Choi Jaeseo らの足跡を、韓国文学の問題であって日本文学とは無関係とする、敗戦後日本の文学史の枠組みも視野狭窄なら、反対にかれらを現時点の韓国における価値判断から裁断し、愛国者か親日売国奴かの弁別を下し、歴史上の人物の犯罪性を言い募ることも、歴史的現実への理解を促進することには繋がるまい。(なおこの点については、林志弦「朝鮮半島の民族主義と権力の言説」『現代思想』(2000年6月、板垣竜太訳)が、従来の禁忌に踏み込んで、民族主義言説の権力性を大胆に裁断している)。

三木清を介して西田幾多郎の影響を受けた韓国の理論家としては、Son Jeong-soo 教授が「世界史的にみた現在の意味」(1939)の著者、徐寅植 Seo In-Shik の場合を検討した。彼の歴史哲学については『思想』誌上に趙寛子による論考「徐寅植の歴史哲学—世界史の不可能性と「私の運命」」がある(957号、2004年1月)。また Ha Jeong-il 教授は NAPF(Nippona Artista Proleta Federatio) と並ぶ KAPF(Korea Artista Proleta Federatio)における国際主義と党派主義との対立を詳述し、Yang Joo-dong の批判に対抗してプロレタリア文学の社会主義的リアリズムを訴えた林和 Lim Hwa の事績を分析した。祖国解放と朝鮮革命はプロレタリアによる世界革命の一環をなすのか、それならば韓国は日本のプロレタリアと団結すべきなのか、反対に韓国の前衛文学運動は日本の Napf のボルシェヴィズムの亜流であってよいのか、などの論争がプロレタリア前衛のなかで発生した。いまその詳細と歴史的展開に踏み込む余裕はないが、この領域でも日本と韓国の研究者の知的交流が必須なことは、明らかだろう。日本のプロレタリア文学

史への側面からの見直しを迫る事例だからである。当時の韓半島の前衛作家たちと日本人作家たちとは、どの程度の交流があったのか。韓国の京都学派哲学者たちは内地留学だったのか、それとも書籍を通じて知識を得ていたのか。そうした基礎的な常識すら弁えていない我が身の無知に身を摘まされる経験であった。だが日本の韓国近代文藝研究者がここにまったく出席していないのはどうしたことか。

フランス派少数者文学研究の孤立

「多文化社会における少数者文学」(WS23)と題するフランス語によるセッションにも顔を出してみた。論者はいずれも見事なフランス語遣いで博士号取得者ばかり。サン・ジョン・ベレスで博士論文を書いたJin Jonghwa教授がイヌイットを扱ったフランス語圏カナダ作家Yves Thériaultを紹介し、ポール・ヴェルレーヌで博士論文のLee Ji-soon教授がドイツ移民のカナダ人作家Régine Robinの社会的発言を検討する。マルグリット・デュラスで博士論文のLee Ka-Ya教授がカリブ海出身のMaryse Condéを紹介する。Maurice BlanchotによるKafkaを論じたPark Kyou-hyun教授に続き、アルチュール・ランボーで博士論文のShin Ok-keun教授が、韓国文学における多文化的他者性の現在を論じた。司会は韓国で教鞭を執るAntoine Coppolaと充実。

日本では、先に触れた宮澤賢治研究の西成彦氏が、1970年代末からのジル・ドゥルーズ研究を踏み台に、カフカのみならず、ポーランド文学でゴンブローヴィチやヴィトケ・ヴィチに手を伸ばし、さらにはラフカディオ・ハーンを切っ掛けに、マルチニクのクレオールも含めて『移動文学論』を縦横に展開して、みずからextraterritorialを実践する雑食性も見事である(ちなみに、マリーズ・コンデは八雲没後百周年に日本に招かれたが、このセッションの発表者で小泉八雲を知っている研究者はひとりも居なかった)。西氏の「移動」ぶりは、あくまでフランスの伝統に忠実に、個人作家の研究者として博士号を取得した韓国勢とは好対照である。だが日本でケベック仏語圏文学研究者といえば、わずかに小畑精和氏があるだけなのに、韓国ではどうしてこれだけ研究者の層が厚いのだろうか。唯一の闖入者の特権として質問してみると、コリアン・ディアスポラと韓国社会の多文化主義化の反映として、ケベックの少数者文学への関心が高まっているのだという。

カフカを頼りにドゥルーズが提唱した概念である*écriture mineure*を無批判に援用する発表が多かったため、試しに四方田犬彦提唱のマラーノ文学という分析装置を紹介してみた。スペインのユダヤ人改宗者たちはマラーノ(豚)と蔑まれたが、奇しくも、韓国ではチョッパリすなわち蹄の割れた豚が、日本人の下駄を連

想させるところから、侮蔑語として通用してきた。いわば在日韓国・朝鮮文学の担い手は、マラーノ文学としての被差別性を背負っており、改宗を強いられればこそより忠実にして日帝の過激な手先となり、あるいは日帝支配下で密かに二枚舌を使って韓国の文学的伝統の灯火を保とうとしながら、光復後には同胞から親日の汚名を着せられることともなった。ここにはドゥルーズの概念を越えて韓国の事例を分析するのに適したモデルがあるのではないか。この問いかけに韓国側からは積極的な反応があった。だが、もっぱらフランス語を専門とする研究者集団であったためか、在日日本語文学は自分たちの領域外なので、という構えだった。

充実した発表にも関わらず、このセッションの聴衆は、筆者ただひとり。大会に参加しているフランス語圏研究者には、フランス語圏島嶼文学やクレオール文学の専門家もあるのに、誰ひとりこのセッションには現れない。発表者たちはいずれもフランス留学組だが、元来、仏文学を専攻していたためだろうか、パリの比較文学者たちの名前は知っているものの、直接の接触はないのだという。国際比較文学会のなかですでにフランス語勢は少数派としてゲッター化しているが、そのなかで少数派文学への関心が、またさらなる縦割りの閉域を作っている。フランス語圏の研究者と韓国人研究者とのあいだの、せっきくの交流の機会がまったく生かされておらず、いささか嘆かわしい。ICLA も大規模になり、欧米のみならずアジア・アフリカを取り込んだのは好いが、大規模な国際会議の通弊か、機能不全を起こしていて、その本来の目的を達成していない。

もっとも顧みれば、韓国のみならず日本でもフランス文学専門家は、概して比較文学者に対しては不快そうな目差しを向け、その業績もハナから無視する傾向が否定できない。思えば 1994 年にタヒチで ICLA 理事会が開かれたおりの学会では、招聘されていた、カリブ海・フレンチ・クレオールの旗手、パトリック・シャモワゾーとエドゥアル・グリッサンとのおふたりが、揃いもそろって、旧植民地帝国の首都・パリでの所用を口実にドタキャンし、筆者は急遽彼らの穴埋め講演を仰せ付かった経験がある。またカナダ在住のユダヤ系作家・ナウム・カタンやコロンビア大学で比較文学者として教鞭を執るガヤトリ・スピヴァックも招かれていた、アラブ圏出身フランス語圏文学者の集いが、パリのアフリカ・オセアニア美術館講堂（当時。元来は植民地美術館で、今世紀以降、フランス移民博物館へと改装）で開かれ、招待されたことがある。その席では鶴飼哲が「在日」やアイヌの事例を見事に論じたが、まったく相手にされなかった。少数派を任ずるフランス語圏知識人のパリ中心事大主義。その通弊が、今回もまた、ソウルで反復されていた。

東アジア発信の「脱・植民地理論」の可能性

一時期の欧米産「理論」全盛時代は、急速に過去の記憶となりつつある。だが、それに代わるあらたな展望が開けてきたわけではない。そもそも代替の「展望」など、今後の人文学に期待できるのだろうか。そんな過渡期の風景のなかで、将来への希望を抱かせる発表にいくつか接した。

ひとつは通常セッションだが、前島志保氏が20世紀初頭の世紀転換期にかけての婦人雑誌の成立と発展を国際比較した。英国の *Daily Mail* や米国の *Daily Mirror* が写真掲載により新聞紙面を一新したのと相前後して婦人雑誌が公刊され、日本でも『婦人世界』(1906)、『婦女界』(1910)が登場する。ところがおもしろいことに、英米では婦人雑誌の購読者層が女性読者に限定されていたのに対して、日本では佐藤卓己も論ずるように、30年代『主婦の友』や『婦人倶楽部』は欧米同様ミリオンセラーへと脱皮したが、その購読者層が違っていた。隆盛の背景には就学率の顕著な向上などもあるが、牟田和恵の研究に見られる概念枠を援用するなら、英米では domestic/public の区別が female/male のジェンダーの区別に厳密に反映する傾向が著しく、男児たるもの女性雑誌を読むなど、沽券にかかわった。ところが日本の公/私感覚では、女性雑誌は home magazine の地位を獲得し、亭主や下宿男子学生こそが、その熱心な隠れ購読者となった、という。

ここからはいくつか重要な帰結が導かれる。まず婦人雑誌の発展は、日本列島に限定される現象ではない。寄稿欄や懸賞付き投稿も盛んになるが、たとえば台湾から応募して日本語女流作家として一世を風靡することになる黃氏寶桃のような事例を読者はご存じだろうか。上海を中心とする大衆雑誌について見れば、『東方雑誌』が日本の『太陽』の焼き直しであり、『新青年』が『白樺』の中国版だったことは明白だが、女性雑誌はどうだったのか。日韓併合期の韓半島での女性雑誌の研究も最近注目されているが、さらには満洲地域の婦人教育雑誌も含め比較検討すれば、二十世紀前半の東アジアにおける女性の社会進出について、従来の定説を覆す事例を発掘することは容易だろう。人民中国における女性の社会進出の下地を創ったのは、宣教師の教育活動とともに、日本の東北地域支配期の女子教育だった。これはまだ公言するのは憚られるが、歴史的事実だろう。Information のみならず media そのものの transnational flow の実態を探る必要が見えてくる。

さらにこうした女性雑誌の男性購読という実態からは、欧米原産のジェンダー理論やメディア論の枠組みには当てはまらない、東アジアの特異性も浮き彫りとなる。同じセッションで発表した台湾出身の Chang Sung-sheng 張誦聖氏は、北米中国比較文学会会長も歴任した人だが、彼女が戦後台湾の美的モダニズムの検

討で依拠したのは、もっぱら七十年代末の柄谷行人、ハバーマース、ペーター・ビュルガーといった理論的枠組みだった。だが呉孟晋氏が最近の研究で明らかにしたように(「民国期中国におけるシュルレアリスムの夢と現実」『現代中国』83号、2009年)、日本支配下の台湾では、日本経由の日本語回路で欧米最先端のモダニズム情報が流入し、咀嚼されていた。そこから栄養を吸って成長した世代の戦後モダニズム藝術を論ずるうえでは、前島氏が検討した日本経由の教育環境・メディア環境は無視できまい。東アジアの女性雑誌は、従来ともすれば domestic な存在と同一視され、婦人を家父長制の支配の下に制御するための道具とみなされる場合が多かった。だが前島論文は、欧米産の理論的解釈を無条件に非西欧世界に押しつけることの限界を計る *theoretical methodology* を提唱しうだけの、深い射程を蔵していることになる。

群島 - 理論の可能性

酒井直樹は、所詮「理論」とは「欧米」側の認知主体がみずからの認識を正当化するための手段としての枠組みであり、「残余」の非西欧社会は、その理論に適切な「生のデータ」を「西欧」の学会に貢ぐことをもって使命とする運命に置かれてきた、と学問における搾取構造を糾弾している(*Traces 1*の導入)。そこまではまったくその通りだが、さてそれならばこの桎梏をいかに切り抜けつつ、しかも代替的なヘゲモニーの誘惑をも回避する方策は如何、となると、さしもの酒井の舌鋒も、北米という獅子身中の虫という境涯ゆえか、とたんに曖昧となる。だがこれに対して目の醒めるような提案が、最終日の一般セッションでなされることになった。英語をそのまま挙げたいが、題して *Insularity and Translatability of Japanese Contemporary Literature*。題名だけみて、ア、これはマンマとヤラレタと思ったが、発表はその期待以上の恐るべき出来だった。発表者は香港市立大学で教鞭を執る Dennitza Gabrakova。ブルガリア出身の才媛である。

題名をみれば、すぐさま思い浮かぶだろう。一億を超える話者を持つ日本語世界は自国の文化流通圏に閉塞しており、逆に海外に発信可能で翻訳可能な作家は、村上春樹にせよ、桐野夏生にせよ、もはやこれを今更「現代日本文学」と呼ぶ必要もない国際作家の風貌を宿している。その事態をこの題名は見事に要約しているが、話はそこにとどまらない。島嶼性あるいは島国根性という表現のうらには、今福龍太や池澤夏樹の「群島」概念が仕込まれていた。エドワード・W・サイードは *traveling theory* を唱えたが、「旅する理論」は、名も知らぬ島の岸辺に漂着する。映画用語で *traveling* といえば移動撮影のことだが、移民先の土地のみならず、移民船による移動は、統一権力など存在しない治外法権の実態を体験する、

不定住への誘惑だった。行き来する多島海を思い描いてみると、そこには、国境を頻繁に横断する現代移動文学論の土壌が見えてくる。

デニツァ氏は、この比喩にそって六つの島を提示した。大庭みな子『舟喰い虫』、有吉佐和子『うみくら』、日野啓三『夢の島』、池澤夏樹『マシアス・ギリの裏切り』、島田雅彦『エトロフの恋』、多和田葉子『サハリン』。島を描く小説を、それぞれがひとつひとつの島であるかのように、海図のうえに並べ、それらの島々を結ぶ航路を作り、島嶼性文学の実相をなぞる身振りによって、みずからの航路を描いてゆく。この研ぎ澄まされた方法論的自覚によって、西欧原産「理論」の論文作法を平然と打破してゆく。それも繊細このうえない読みを、個々の作品に施しながら。

日本のどこかの文藝誌に早々に翻訳が掲載されることを願って、これ以上の紹介は慎もう。試しに以上の布陣から自分で思いつく限りの読解を試みて、その後、著者の分析と読み比べてみるのも一興だろう。どちらに軍配が上がるだろうか。国内の市場に媚びを売って生業としている程度の並大抵の日本の文藝批評家では、デニツァ氏の読みを前にすれば、自らの島嶼性を露呈するだけだろう。容易に外国には流通しない（が実際には他言語へと漂流している）作品を相手にしながら、それを逆手に取って日本でしか通用しない批評言語を乗り越えてみせる手腕には、作品の読みに対する自信のほども窺える。

同じセッションでは偶然ながら東京経済大学の西岡亜紀氏が、池澤夏樹の父、福永武彦の『死の島』（1971）を題材に、懇切な文体論を展開した。原爆の記憶に関する主人公の回想部分がカタカナ表記で記されているが、それはウィリアム・フォークナーの *The Sound and the Fury* (1929) のイタリック使用の意識的剽窃だった。発表者が選んだ福永のカタカナ表記の文面は、内容のうえでもその後1955年に来日の機会を得たフォークナーの論説 *To the Youth of Japan* の主張ともぴたりと呼応していた。だがそれが日本語を理解しない聴衆に伝わらなかったのは惜しかった。また戦中期の慣用としての平仮名とカタカナの使い分けについての歴史的な説明などもなお不十分。とはいえ特異な表記法による表現力の厚みには、日本語を知らない研究者から、蒙を啓かれた、といった講評があった。もうひとりの発表者、大阪大学の Linda Galvane 氏は、村上龍や山田詠美の初期作が描くアフリカ系アメリカ人の心理の綾を分析したが、こうした日本における多文化小説では、ガイジンのたどたどしい日本語や、反対に純正英語で発言され、ほかの日本人登場人物には理解不能な外国語会話を、わざとカタカナで表記する策略も執られている。そしてこうした書記体系の多様さをもっとも極限まで推し進めて詩的言語の実験に挺身しているのが、デニツァ氏も言及し、ブラジル絡みの企画で今福とも協働している、吉増剛造の場合だろう。

ハングルまでも自在に取り込んで、音声と視覚に訴える儀礼的パフォーマンスを実践している吉増夫妻のテキストは、もはや国籍不明である。そして皮肉なことにも、移民社会であればこそ表記の標準化に喧しい北米合州国で、大学出版会から公認される、薄っぺらで diacritical の介在を許さない偏狭な正書法に則る限り、吉増詩文の polyphony はおろか、山田詠美や村上龍のテキストに仕込まれたカタカナ表記の多声性も、そのままの質感を維持した状態では、英語への翻訳に耐えない。編集上の検閲過程で、多声性が裁断され、貧困化されたかたちでしか、翻訳結果は生き残れない。ここには多文化主義、transnational humanities の時代ゆえに、かえって書記の自由が抑圧されるという、翻訳の逆説が顔を出す。だが Archipelago の言語実践は、覇権言語による translatability への信仰と背馳し、insular によって universal を骨抜きにする。

多言語性を内包したままの言語態が、原理的に、伝統的な翻訳という概念の許容範囲に抵触する。そして皮肉にも多文化の共存を国是とした筈の移民大国(=北米合州国)において、翻訳による抑圧が極限まで強化される。「理論」と称する、誰でも簡単に利用できる粗雑な調理法の跳梁跋扈が、こうした書記の抑圧と表裏一体であることも、もはや明らかだろう。質疑応答のなかで、デニツァ氏は控えめな表現ながら、脱植民地主義の理論が明らかにしたのは、理論の普遍的通用可能性という権威の破綻だった、と喝破した。昨年物故したクロード・レヴィ＝ストロースが 1936 年に南米ブラジルの新興都市サン・パウロで写真を撮ったその場所を再訪して、72 年後の変貌を記録するという、人類学者生前最後の事業に携わった今福龍太は、その人類史的な経験をも糧として、自らの戦術を練ってきた。そしてすべてが相互に依存しながら、どれひとつとして支配的な権力を行使しえない群島という生存様式を種子として、覇権 hegemony へと肥大化することを回避する脱-理論の可能性を示唆している。それは奇しくも、李御寧氏が冒頭の基調講演で引用したレヴィ＝ストロースの『今日のトーテミズム』の叡智にも呼応していたはずである。

本学会報告の意図について：必要なる蛇足として

学会動向報告という作法は、近年では北米中心のアカデミズムの業績評価対象やアングロ・サクソンの社会習慣と合致しないためか、学会誌の誌面から削られることが多い。だが学会という場で当事者は互いに予期しないままに不意に浮上した課題や、互いに無関係なまま共通する問題意識が発芽してくる様に気づいたならば、それを紙面が許す範囲で報告しておくことには、大きな教育的価値、さらには将来の企画立案にむけた創発的価値が認められてしかるべきだろう。海

外での先行研究動向を数年遅れで後追いするという追従癖からなお脱し得ず、問題発見の企画力に欠けることが国際的にも顕著な日本列島の人文事情からの脱皮のためにも、一言したい。学会誌からは論文と書評以外の文書の掲載を一切排除するという北米流純粋主義には、それなりの理屈もあるが、その機械的な墨守には、得失両面あることにだけは、反省を加えてしかるべきだろう。ツイッターの例に漏れず、学会情報でも脇役の短報にこそ、新たな遭遇の契機が潜んでいる。

今回で19回目を迎える国際比較文学会は、前回2007年のリオ・デ・ジャネイロ大会の折、総会でカナダとの決戦投票の末、韓国での開催が決定される、という異例の経緯で実現した。会場も大邱のコンヴェンション・センターが予定されながら、経済危機などの外因も働いて、結局首都ソウルの中央大学校が会場に選ばれた。理事会では韓国側の一方的変更を違約と見て、感情的な反発も噴出した。だがこれに目クジラを立てるのでは、かえって不見識、プリンストンがニューヨークに、あるいはブレーメンがハンプルクに変更されたからといって、それで大会中止だ、といった騒ぎになるだろうか。そう執行部を説得し、韓国での実現に尽力したのは、理事指名委員として名を連ねていた上垣外憲一教授だった。舞台裏ながら備忘録として付記しておきたい。

いくつかの反省点

「比較文学の辺境を拡大する」とのテーマを掲げた本大会では、個人発表の提案が八百件近くなされた。日本からの参加者を集計する手段は存在しないし、その必要はないとのご意見もあろう。だが、どのような企画が浮上しているのか、日本比較文学会としても或る程度の情報が事前入手できる体制が取れば、より有機的・積極的な参加を会員内外に促す手だてともなり、連携もより容易となるだろう。日本比較文学会会員とは別個に、筑波大学の斎藤一（はじめ）教授による *Reconsidering "Reception" and Transformation of English Literature in Asia* と題する symposium も企画されていた。会員側からは、芳賀徹教授企画による *Intellectual Interaction in East Asia in 1920s and 30s-Poetry, Art and New Utopianism* および、筆者組織による *The Noguchi Legacy: Between Patriotism and Internationalism-Artistic Vagabondage of Yone and Isamu Noguchi, from Poetry to Sculpture in Conflict between the East and the West* が、日本関係者による企画のすべてであった（稲賀企画のパネルについては、本稿で言及することは避ける。傍聴者による第三者評価を期待したい）。とはいえこれらはあくまで個人的な発意によるものであり、企画者同士、お互いに連絡は一切取れて居らず、ネット版のプログラム草案が公開された段階で、はじめて互い

の企画の輪郭を知り得た、という状況だった。日本比較文学会として何らかの組織的な企画を立案すべきか否かには、賛否両論あろうが、隣国での大会に対して、日本側の学会組織としての働きかけは不在に等しかった。これは ICLA 理事としての反省点である。

さらにいえば、現在、韓国や大陸中国さらには台湾・香港地域にくわえ東南アジアに至るまで、若手の多くの日本語・文学担当者が現地で教鞭をとって活躍している。またこれらの地域から日本に留学中の博士課程学生、講師、学術振興会会員も少なくない。だが今回のソウル大会を見る限り、こうした立場にある若手からの参加はけっして積極的ではなく、また関連学会および大学研究室側からの支援も、個別例を除けば、組織的には図られていない。そもそも比較文学という分野にそれだけの学術的魅力あるいは売り込みマーケットとしての求心力があるのか、学会としての認知が十分なのか、さらなる分析が必要ではあろう。ただ昔日のように安閑として有意の若者の出現を待つ、という受け身の姿勢だけでは、およそ有力な次世代の発掘・養成は覚束くまい。

なお、ここ数回の国際大会では、symposium, panel, seminar といった形式の参加は、proceedings からは排除することが内規となっており、また原則として ICLA 理事会の committee が主体となって運営する workshop も、その成果は proceedings には組み込まず、別途に公刊を目指すことが、理事会での了解事項となっている。これは公刊された投稿規定などではかならずしも判明ではないが、その背景には幾つか無視できない要素が働いている。まず北米および英語圏では、従来の proceedings では査読体制が不明確なため、これに掲載されても業績として評価されない場合が多くなり、若手の研究者が投稿に消極的となりつつある。さらに予算事情の悪化から、大会組織国の財政負担を極力軽減したいという意向とともに、人文関係では査読を経た論文集といえども、出版界の閉塞ゆえに、容易には編著として公刊できない現状がある。理事会構成員の多くは、それなりに実力ある学者としての自負もあり、自らの編著を大学出版会から公刊しつつ、弟子筋や学統の業績造りを支援することが、職業上不可欠だ。すべてが業績主義に染まった昨今の姑息な学閥事情を反映する話で恐縮だが、ICLA にも薔薇色の国際協力出版事業など、積極的に推進するに足るだけの資金援助を受ける才覚も、財政的足腰もない現状だけは直視したい。

将来への布石

国内学会組織と国際比較文学会とで double membership を採用している日本は、学会員数で 700 名を越えている。これは 2000 名強 (2007 年・リオ大会時点)

から1500名前後(2010年・韓国大会直前。韓国大会のための入会者を省く)を推移している国際比較文学会全会員数の、三分の一から五分の二を占める計算であり、(為替レートによる変動はあるが)ほぼそれに相当する割合の資金をICLAに対して提供していることになる。だが多くの国際機関の類例に漏れず、日本は金こそ出すが発言はしないという「美德」に甘んじている。勿論それはそれで、ひとつの見識かもしれない。数に恃む威力行使は見苦しい。とはいえ数に相応しいだけの国際的学術的貢献は必須だろう。学会誌である『文学探究』*Literary Research/ Recherche littéraire*は、元来、英語・フランス語以外の少数言語圏の最新書誌情報を伝達する媒体としての役割をも期待して発刊された学術誌である。だが現在まで郵送されてきた(今後は、その郵送料資金繰りも先行き不透明だが)バックナンバーを見れば一目瞭然のとおり、そこに日本関係の話題が提供されることは、ほぼ皆無といってよい。近年ではヨコタ=村上孝之氏による東浩紀の『オタク』英訳版への書評が2009年度の25巻に出たばかり。間欠泉の噴出にも及ばぬ頻度で、存在の影があまりに薄い。

もとより日本語という入超市場は、少数言語圏と形容するには巨大すぎ、その内需を満たすことだけで日本の学会は体力を消耗している。70年前の大東亜共栄圏の悪夢への贖罪もできぬまま、敗戦後の反作用で内向きを国是とし、超高齢化を迎えた日本社会は、この中途半端に巨大な市場に埋没して動脈硬化を亢進させてきた。海外への学術発信の意欲のみならず、気力・体力までも喪失させて低迷する日本。その一方で、隣国・韓国は、国内市場が狭隘なため、かえって強引に国際基準に合わせて強行突破を図り、経済や映画市場のみならず学会市場も隆盛を見せている。此彼対比しての優劣論が流行だが、しかしこうした比較そのものが、国境に囚われた旧態依然たる発想法だ。日本語市場を列島内に限定する見方が、そもそも視野狭窄、時代錯誤であろう。国内需要の落ち込みと裏腹に、アジア各地で、有意の若者が日本語教育・日本文化教育の前線に立って活躍している。韓国・中国からの人文系留学生も、なお増加の兆候を見せ、ベトナムやインドでも韓国や日本への関心が高まっている。これら貴重な人材の確保と育成、将来にむけての飛翔の青写真を示すことが急務となっている。東・東南・南の三アジアと日本とを個別に結ぶ「点と線」の発想は、すでに時代遅れだ。これら群島をなす「三面のアジア」の学術的相互交通を多様に構想すること。そこに21世紀前半のtransnational humanitiesが直面すべき挑戦がある。

*

末筆となるが、本ソウル大会の実現のために尽力されたチュン・チュンホ Chung Chung-ho 会長、また実務のすべてを事実上たったひとりで見事に切り

盛りしたチョ・ソンウォン Cho Sung-won 教授に、この場を借りてあらためて御礼申し上げたい。舞台裏の兵站関係は、僅か数人が個人責任をもって対応し、また会期中は中央大学を中心とする学生諸君が大動員され、日当わずか一万ウォン（内部情報）で献身的かつ細心の対応ぶり見せた。これら裏方にも気配りを忘れない閉会宣言でスタンディング・オベーションを受けたチョ・ソンウォン教授と、これで ICLA 副会長の責からも解かれたチュン会長と。大役を果たしたばかりのそのおふたりとは、偶々その直後、中央大学の丘の頂上にある裏門からすぐの学生街の食堂で、李応壽さんともご一緒になり、改めてその労を犒ったことであった。

平成 22(2010) 年 8 月 30 日